

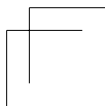
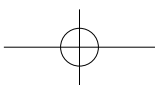
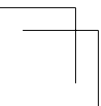
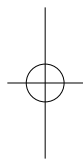
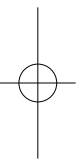
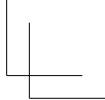
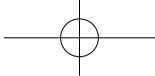
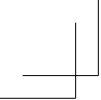
余命宣告

～残されし男の諷詠～

射場和行



青山ライフ出版



プロローグ

「お〜い 満里子〜！ 元気でやってるかい〜？」
妻の眠るお墓を前にして、私の発する肉声第一声である。

そしてゆっくり跪き、

「どうして俺を置いて逝ったんだ？」

「俺はこれからどう生きていけばいいんだい？」

との呟きから妻との対話のような御祈りが始まる。

2018年の盛夏、医師から突然、妻の余命は数ヶ月あるかないかとの宣告を受けた。まさに青天の霹靂へきれき、天地異変。なのに、対処するすが何も分からない。

宣告されたご本人は、それなりに覚悟していたのか、それともそのショックが大きすぎるが故の保身本能なのか、意外にも冷静に受け止めている。

「どうして満里子が？」

「ひょっとして夢じゃないか??？」

「われわれは何か、悪いことをしたか??？」

打ち寄せる波の如く消えない疑念、悔しさ。そしてそこから出た憤りのようなものが込み上がる。崖っぷちに立たされた彼女をなんとか元の方へ引き戻したいと思うも、無力感に襲われるだけ。

ならば出来るだけ彼女をハッピーエンドで見送ってやりたいと思うが、週単位で体力を落としていく姿に戸惑い、十分な準備時間も持てない。

そして居なくなることの心構えもできぬまま、あれよあれよという間に天国へ逝ってしまったのだ。

お別れ会、そして四十九日が過ぎると、急になんともいえない空虚・喪失感が襲ってきた。外出から戻っても、また食事をしていても居るべき人が居ない。

「ああ、疲れたあ〜！」とか、「あれ、どうなった？」とか、日々の感想や暮らしのなかの些細なことを打ち明ける相手がいない。またぞろ疑念、悔しさが間歇泉かんげつせんの如く込み上がり、深い喪失感に苛まれる。

妻の満里子とは東京の勤務先で出会った。

出会いといっても、私の入社4年目に新入社員として同じ課に配属されてきた後輩である。取柄は天真の明るい笑顔で、周りの人気者であった。

5年目になって私が大阪へ転動したときから二人の交際が始まった。

離れてから知る恋心というよくあるパターンで、遠距離交際が始まった。

東京ー大阪のどこかの中間駅で会って、伊豆、箱根に、あるときは木曾、長野に、またあるときは金沢、能登にと観光地を巡っていた。

そして毎回、新幹線のホームでの別れ。窓越しに手を振りあつての見送りであるが、列車が

動きはじめると満里子の笑顔からポロポロと涙がこぼれだす。そんな彼女の純真さ、心の優しさにひかれ、2年間の交際を経てゴールインした。

以来、三人の子育て、5度の私の国内外の転勤に主婦として家庭を支えてくれた。そして壮年になってから更に3度もの内外への単身赴任においても、その留守を守ってくれたいわゆる「銃後の妻」である。

その単身赴任中に妻が脊椎間狭窄症を患い、幼少のころから続けてきた大好きなダンスを踊ることはもとより、買い物等の日常生活にも支障をきたすほどの重症に陥った。思春期、反抗期の二人の息子を抱えた銃後の暮らしがどれだけ大変だったか想像に難くはない。しかし海外にいる私は手を差し伸べられず、ただ遠くから見守るしかなかった。

そして単身赴任が明けた帰国後によく、狭窄症の手術。

首尾よく元の身体に復帰でき、大好きなダンスをしたり、中国語サークルの教壇に立ったり、まさに快活な日々を謳歌していた。

ところが、「一難去ってまた一難」の言葉通り、実家の母親の介護に追われる身となった。そしてその後の看取り、次には残された父親の世話、そしてその看取りと、切れ目のない負担。

苦勞が続いたのであった。

一般的にがんは遺伝性の要素が高いというものの、元凶はストレスともいう。親の世話をするの世の常、長女の宿命(?!)とは言わぬが、私の海外単身赴任が相応の負担・ストレスを強いたことは否めず、多少の罪悪感を覚える。

がんといえば、21世紀の今でもなるべく口外したくないという風潮が根強い中で、臍臓がんで逝ってしまった身内中の身内のことを書面にするのはいかなものか、天国の妻(享年65)はなんと言うだろうか、の思いがある。

加えて、伴侶を失ったものでないと分からない悲哀、寂しさ、そして取り戻せない喪失感。そんな打ちひしがれた地獄(?) 的境遇からなんとか脱皮したい、自分の2本の脚でしっかり立ちたいと、もがいていた傷心の自分を曝け出すことの良し悪し?! 。

この間に生じた内田裕也、野村克也両氏の後追いのことは別にして、グルーミーな日々を

送っていた頃、同じ境遇に苦しんだ人の手記とかがないものかと、いろんな図書をあさってみたがほとんど見当たらない。

そりゃそうだろう。そんな自閉的心理状態、境遇にあつては、誰もなかなか文字にして書き留める気にはならないのが普通だろう。それより重要なのはまず、比較的男性に多いと思われる、引き籠もり↓不健康↓発病↓後追い という負の連鎖からいかに逃れ、立ち直るかである。

幸か不幸か私の場合、趣味にしていたテニスや俳句のお陰で「引き籠り」若しくは「後追い」の難から逃れられたように思える。

テニスをやっている間は頭の中が空っぽになり、まして勝負に専念していると疑念、悔しさ、虚無感…… 全てが吹っ飛んでいく。せめて日中だけでもなにか他のことに「没頭する自分」を作り上げるよう苦心した。

また月例でやっていた俳句会にも大いに救われたような気がする。というのも、俳句そのも

のが感情をもちに出すことを許さず、ある一定の客観性が求められる文芸であることだ。句作りでは自ずと悲しみ、悔しさ、寂しさのような感情の露出を抑制することとなる。女にはない男固有のメソメソ、クヨクヨなんてのは御法度で、そんなもの「たて蓼も喰わず」である。

あの青天の霹靂以来この3年間、失った伴侶への思慕、そして悔しさ、寂しさを、折々の風景に織りまぜて、看病中も、そして逝去後の「傷心地獄」のころも休まず詠んでいた五七五。読み返してみると、その時を経た心象の移り変わりがまざまざと蘇る。それこそ駄句のオンパレードではあるが、怪我の功名とでもいうのか、テニスと違い文字として生涯私の手元に残るしろもの。まさに残された男の貴重な「生きしるし」であった。

はや3年を過ぎた今や遅しの感あるも、大好きな妻との「架け橋」として、またお世話になった妻への感謝を籠めて、これを一つの冊子として纏めよう。相当の逡巡を経ての恥さらしを決断したのだった。